「駅伝」のルーツ!?　「駅伝制」「飛脚」

「駅伝」といえば、多くの人がお正月の「箱根駅伝」を思い出すのではないでしょうか。大学生がタスキをつなぎながら箱根の山を駆け抜けていく姿を見ると、テレビから目が離せなくなってしまう人もいるかもしれません。

さて、そんな「駅伝」ですが、発祥はいつなのでしょうか？「駅伝」の読み方は「えきでん」です。正式名称は「駅伝競走」です。駅伝は、数人が一つのチームとなり、長距離を区切った「区間」をリレー形式で走る陸上競技の一種です。駅伝は、古代から近世まであった「駅伝制（駅馬・伝馬制）」が由来と言われています。「駅伝制」は、「駅馬」（えきば）や「伝馬」（てんま）という馬を使って、手紙や物資などを運ぶことを主とした制度のことで、「大化の改新」の頃には馬を乗り継ぐための施設や、宿泊施設などが整備されました。また、鎌倉時代になると、「飛脚」（ひきゃく）が登場します。飛脚とは、金銭や手紙、物品などを運ぶ仕事に従事する人のことで、現在なら歩くと２週間程度かかる東京～大阪間（約 500 km）を３日～4 日で走ったと言われています。飛脚は一人で走ったわけではなく、宿場と呼ばれる場所までの 10 km程度の距離を交代して走ったそうです。これらの「駅伝制」や「飛脚」などが駅伝のルーツと言われています。

日本で初めて競技として「駅伝」が行われたのは、1917 年の「東京奠都（てんと）記念東海道駅伝徒歩競争」で、讀賣新聞社会部長の土岐善麿の発案で開催されました。「東京奠都」とは、明治維新の際に江戸が東京になり、都として定められたことを意味します。1868 年（明治元年）10 月 13 日に明治天皇はそれまでお住まいだった京都から、東京の江戸城へ入られ、翌年に政府が京都から東京に移されました。そのことを記念して、東京奠都から 50 年後の 1917 年に「東京奠都 50 周年奉祝大博覧会」が開催されました。この博覧会のイベントの一つとして、明治天皇が京都から江戸城へ移動されたルートを再現しようという発想で生まれたのが、「東海道駅伝徒歩競争」です。開催にあたり、大日本体育協会の武田千代三郎が東海道五十三次の駅伝制（駅馬・伝馬制）からヒントを得て「駅伝」と名付けたと言われています。この大会では関東組と関西組の２チームが京都府の三条大橋から東京都の上野不忍池までの約 508 km（23 区間）を、昼夜問わず３日間かけて走り抜け、先にゴールしたのは関東組でした。東京奠都記念東海道駅伝徒歩競争」が大成功を収めたことで、1920 年に「箱根駅伝（東京箱根間往復大学駅伝競走）が始まります。

駅伝と言えば「箱根駅伝」の印書がとても強いですが、学生の大会だけでなく、実業団や社会人、小中高生の大会など各地で開催されています。また、市民ランナーたちが気軽に産ができる大会も各地で開催されていますので、友人知人たちとチームを組んで参加してみてください。